

あとがき

私は、一九九五年から二〇年以上、スクールカウンセラーとして活動してきました。そして縁あって、二〇一八年から個人開業して、同じ臨床心理士である妻と一緒にカウンセリングルームを運営しております。そういった二〇年以上の経験の中で、妻とは、子どもへの支援について日々さまざまなテーマを話し合ってきました。その話し合ってきたプロセスが、この本のさまざまな工夫として形になったのだと感じています。また、二人の子どもたちに、子どもの立場からの意見を聞き、自分の実践を考えることが何度もありました。本書の背景には私の家族のサポートがありました。この場をお借りして、妻と二人の子どもたちに感謝を伝えたいと思います。

また、大学院で一緒に学んだ大河原美以先生には、引用させていただいた図を画像ファイルでいただきました。学校現場で子どもの見立てを考えるとときには非常に役立つとらえ方なのですが、図を自力で再現することが難しかったため、ファイルでいただき本当に助かりました。この場をお借りして感謝申し上げます。

学校現場で多くの先生方と子どもの支援について話し合ってきたことも、本書に書かれている工夫の源となっています。先生方は、私に聞いかけ、私に学びの機会を与えてくださったと感じ

ております。かかわりのあつた多くの先生方に感謝申し上げます。

学校という場は、多くの大人と子どもがかかわり合う本場に価値ある場だと思います。私たちの未来を生み出している場です。その場で、子どもたちを支えていくために、本書の小さな工夫が少しでも役に立つものであることを願っております。

話は変わりますが、小学生の頃に故郷のデパートの書店で、母に『知らないとそん500』（間羊太郎著、講談社、一九七三年）という本を買ってもらいました。髪の毛についたガムを取るのにコールドクリームが役に立つとか、小さな釘を打つときには割り箸の先で挟むと指を傷めないなどといった、生活の知恵が五〇〇個も紹介されていた本でした。すごく面白くて何度も何度も読みました。今は手元になくなってしまったのが残念です。

本書では、その本のちょうど一〇分の一の五〇の小さな工夫を集めることができました。「昔買ってもらった本に似ている本を書いたよ」と、亡き母に報告したいような気がします。本書も、皆さんが何度も読み返してくださるような本になりますように。

最後となりましたが、執筆の機会を与えてくださった、ほんの森出版の小林敏史氏には、深く感謝申し上げます。

二〇一九年三月

半田 一郎